戦没画学生慰霊美術館「無言館」

「無言館成人式」で新たな門出を祝う

作家の落合恵子さんから自筆の手紙

上田市古安曽の戦没画学生慰霊美術館「無言館」で先月29日、画学生の遺作の前で自らの新たな門出を祝う「無言館成人式」が行われました。

19回目となる今年は、県内外から14人の新成人が参加し、館内で戦没画学生の遺作を鑑賞した後、画学生の名が刻まれた石板「記憶のパレット」が設置された庭で式を開催。作家で子どもの絵本専門店「クレヨンハウス」を主宰する落合恵子さんが、一人ひとりに声をかけながら自筆の手紙を手渡しました。

落合さんは、「自分の意思とは関係なく戦争で命を落とした人たちがいることを忘れないよう、また次の世代が〝生まれてきてよかった〟と思えるよう願いながら本を扱ってきた」とし、『ペスト』などの著者アルベール・カミュの言葉「私の前を歩かないでください。（略）私の後ろを歩かないでください。（略）私と並んで歩いてください。そして私の友でいてください」を紹介。「あなたを生きることができるのは、あなただけです」と話しました。

また窪島誠一郎館主が自作の詩「無言の詩」を朗読し、上田市塩田出身のコカリナ奏者・黒坂黒太郎さんによるコカリナ演奏も行われました。

信州大学で音楽教育を学ぶ伊藤有希さん（上田市上田原）は、「これまでも何回か無言館の作品を見てきましたが、今日改めて画学生の遺作を見て、大切なものを伝える力のことを考えました」「戦争があったことを忘れてはいけない。考え続けなければと思います」と話していました。

「太郎山登山競走」

2年ぶり開催

新緑の尾根を駆け上がれ！〝熱気!!〟

上田市民の山として親しまれる太郎山の山頂（1164m）まで市街地から一気に駆け登る第7回「上田バーティカルレース―太郎山登山競走」が3日・4日に開かれ、県内外から参加した600人余がタイムを競いました。

昨年はコロナ禍で中止となり、今年は感染防止対策を講じて2年ぶりに開催。3日は累積標高差約700m・距離3.7kmの真田幸村コース（初級）と同1000m・距離5kmの猿飛佐助コース（中初級）のバーティカル（駆け登り）、4日は上級者による距離18kmと25kmのスカイレースが行われました。

3日には土屋陽一市長も駆けつけ、「走ることで太郎山への関心が高まり保全につながれば」とあいさつ。実行委員長の松本大さんが「無事下山することが大事です。準備運動をしっかりして2mの距離を取ってほしい」など注意を伝えた後、小学校低学年から70代までの男女が青木村義民太鼓と拍手に送られ10秒ずつ間隔を置いて次々とスタートし、新緑の尾根に取り付いていきました。

大桑村から参加した加藤利雄さん（60歳・木曽森林組合所属）は、2年前にレースに参加して「スカイランニングにはまった」とのこと。「コロナ禍で大会が次々と中止になるなか、上田の大会開催に感激しています」と話し、入念に準備体操をしてスタートしていきました。

「蚕都上田」の輝きと未来

150 信濃史学会会員 阿部 勇

常田館製糸場⑤ 従業員募集と繭集荷

昭和3年の従業員1248人。これは独立した製糸場としては上田小県最多の従業員数です（依田社は20余の工場を合わせて約6000人）。

県内の南・北佐久、更埴、上・下水内、県外の北上州、越後、越中富山などから働きに来ました。そのため工場内には宿舎5ヵ所、食堂、米・漬物蔵、味噌蔵がありました。

「年末閉業と同時に募集戦が行われ、正月も、元日以外休みなく、皆、各担当方面に出勤した。これは中々の大仕事であり、若し予定通り募集が出来ぬという様な事であれば操業に重大な支障を来たすので本当に真剣であった」（『思い出』）。年末年始は製糸場間の募集「戦」、募集過程の記録簿は製糸場の宝でした。

繭をいかに集荷するかも大問題。①養蚕農家を廻って②地元の繭市場から③他地域の繭問屋や④出張取引所から⑤契約養蚕農家から（これが一番質の良い繭が得られる）などがあり、大量の繭を必要とする常田館では①～⑤をしました。③では藤岡、深谷、伊豆にまで出向き、④では明治40年に茨城県友部、昭和11年に群馬県新町に出張所を開設しています。

常田館に展示されていた繭

まるこ福祉会で「こどもレストラン」

児童らが地元高大生と交流

元気に遊ぼ！

5日の「こどもの日」を前に1日、上田市長瀬のまるこ福祉会「きらり」で第33回「こどもレストラン」が開かれ、児童40人と保護者が高大生らと交流しました。

この日は当初、ジャガイモの植えつけなど農業体験を行う予定でしたが、前夜の雨で室内イベントに変更。感染防止に配慮しながら、遊具や鬼ごっこで約40人の高大生や地域ボランティアと思いっきり遊び、昼食を食べながら交流しました。

簡単な英語を使ったゲームや鬼ごっこを指導した田中崇さん（市内本郷・66歳）は、「長年ここに通ってお手伝いをしているが、コロナ禍で子どもたちはエネルギーの発散場所を失っている」と話し、笑顔で走り回る子どもたちに目を細めていました。

「こどもレストラン」は毎月第一土曜日に開いており、初めてボランティア参加した丸子修学館福祉科3年の並木悠馬君は「元気いっぱいの子どもたちと遊ぶのは楽しく、勉強になります。これからもかかわっていきたい」。柳澤正敏理事長は、「コロナ禍で各地の子ども食堂が開きにくくなっているが、こんなときだからこそしっかり食べて元気に遊べる場が必要だと開催しました」と話していました。

陽葉

朝早く目が覚めてしまいラジオをつけたら、「NHKラジオ深夜便」のアンカーを13年間務めたという宮川泰夫さんが講演をしていました。その中で作家の五木寛之氏が「回想を楽しむ」をテーマに同番組で語った内容を紹介していました◆「高齢者が回想話をするのは、決して後ろ向きの姿ではなく、来し方を振り返ることで今の自分に活気をとりもどしているのだ。自らを見つめ直し二度目の人生を生きいき過ごそうとしているのだ。そう考えたらどうだろう…」。うとうとしながらそんな意味の話だったかと聞き取りました◆私は高齢者の皆さんが自分史をまとめ、体験を文章化する仕事の手伝いをしたことがあります。書くことは決してラクではなく、記憶を呼び覚ましながら「楽しそうに苦闘していた」方々を思い出しました。ところで、高齢者が身近におり「いつも同じ話を聞かされてたまらない」と感じている読者の皆さん、この際五木理論をほんの少し、参考にしてみませんか。（F）

矢幡正夫さんが写真展を開催

塩田平の多彩な春紹介

地元の塩田平を長年撮り続けている矢幡正夫さん（76歳）が先ごろ、「塩田平の四季 春」と題した写真展を「とっこ館」で開き、塩田平の多彩な春の風景15点を展示・紹介しました。

当地の四季の魅力を知り尽くす矢幡さんは、無言館館主・窪島誠一郎さんとの共著『鼎、槐多への旅 私の信州上田紀行』で写真を担当し、上田図書館倶楽部の季刊誌『環―千曲川地域の人と文化』の表紙を10年間飾っています。また各写真展などでも滋味あふれる作品を発表しています。

とっこ館では今年、四季の風景展を開く予定で、今回は1回目の「春」。水面に里山を映すため池や青空に泳ぐ鯉のぼり、花々に彩られた古刹中禅寺の参道、90歳の古老の田植え姿などに来場者が見入っていました。

「見落としたり、見過ごしていた風景に新たに出合っていただき、写真に撮ってみるきっかけになればうれしい」「ふるさとの大切さが伝われば」と矢幡さん。次の「夏」展に向け準備を始めるとのことです。

UCVと「上田自然に親しむ会」が共同制作

太郎山の植物手帖

上田市の児童に寄贈

上田ケーブルビジョン（UCV）では創立50周年事業として、冊子『太郎山の植物手帖～裏参道から頂上』を「上田自然に親しむ会」と共同制作して発刊。

先ごろ上田市教育委員会を通じ、市内6校の児童に使ってほしい1000冊が寄贈されました。

「上田自然に親しむ会」（西沢典之会長・会員23名）は、01年夏から太郎山の主に裏参道の植物調査を継続的に実施し、調査記録は上田市立博物館に寄贈、16年には会員向けの冊子を製作しました。

同書はこの内容をさらに充実させたもので、両者で構成を詰め、会員が原稿作りに取り組んで完成。草木編189種・木本編49種の四季の植物を写真とともに紹介しています。先ごろサントミューゼで開いた刊行記念写真展も、2日間で約360人が来場する盛況でした。

「親しむ会」会員も同席した寄贈式で、UCVの母袋卓郎社長は「子どもたちが、太郎山に〝こんなに多くの植物があるんだ〟と発見し学んでいただければ」とあいさつ。峯村秀則教育長は「冊子を手に太郎山で植物に接し、体験的・主体的に学ぶことができる」と感謝していました。

冊子はA5判カラー104ページで2000冊を製作。今回の寄贈分は、太郎山をフィールドに学ぶ児童と学校図書館などへ配られます。

サンテラスローズフェア

28日㈮～6月6日㈰ 東御市文化会館前庭

ローズフェアが、28日㈮から東御市文化会館正面玄関前庭で始まります。

大竹茂雄さんら同館スタッフとサンテラスバラの会が丹精して育てたオールドローズ100種とモダンローズ350種、500株のバラの祭典です。

時間は10・00～16・00で、入場無料。バラ苗やバラ雑貨の販売もあります。

週末はミニコンサートを開催。28日㈮は11・00～、ピアニストの神原恵里子さんと丸山晩霞記念館長の佐藤聡史さんがギターで。29日㈯・6月5日㈯・6日㈰は13・30～、サンテラスバンド他が出演します。

フェア開始前からバラを鑑賞することができます。

▼東御市文化会館 ☎㉒3700

百菜チューボー

■料理 牧野隆彦さん

からし稲荷

「無言館」など注意を伝えた後、新緑の尾根に取り付いていきました。

大桑村から参加した加藤利雄さん（60歳・木曽森林組合所属）は、2年前にレースに参加して「スカイランニングにはまった」とのこと。「コロナ禍で大会が次々と中止になるなか、上田の大会開催に感激しています」と話し、入念に準備体操をしてスタートしていきました。

19回目となる今年は、県内外から14人の新成人が参加し、館内で戦没画学生の遺作を鑑賞した後、画学生の名が刻まれた石板「記憶のパレット」が設置された庭で式を開催。作家で子どもの絵本専門店「クレヨンハウス」を主宰する落合恵子さんが、一人ひとりに声をかけながら自筆の手紙を手渡しました。

落合さんは、「自分の意思とは関係なく戦争で命を落とした人たちがいることを忘れないよう、また次の世代が〝生まれてきてよかった〟と思えるよう願いながら本を扱ってきた」とし、『ペスト』などの著者アルベール・カミュの言葉「私の前を歩かないでください。（略）私の後ろを歩かないでください。（略）私と並んで歩いてください。そして私の友でいてください」を紹介。「あなたを生きることができるのは、あなただけです」と話しました。

また窪島誠一郎館主が自作の詩「無言の詩」を朗読し、上田市塩田出身のコカリナ奏者・黒坂黒太郎さんによるコカリナ演奏も行われました。

信州大学で音楽教育を学ぶ伊藤有希さん（上田市上田原）は、「これまでも何回か無言館の作品を見てきましたが、今日改めて画学生の遺作を見て、大切なものを伝える力のことを考えました」「戦争があったことを忘れてはいけない。考え続けなければと思います」と話していました。

「太郎山登山競走」

2年ぶり開催

新緑の尾根を駆け上がれ！〝熱気!!〟

上田市民の山として親しまれる太郎山の山頂（1164m）まで市街地から一気に駆け登る第7回「上田バーティカルレース―太郎山登山競走」が3日・4日に開かれ、県内外から参加した600人余がタイムを競いました。

昨年はコロナ禍で中止となり、今年は感染防止対策を講じて2年ぶりに開催。3日は累積標高差約700m・距離3.7kmの真田幸村コース（初級）と同1000m・距離5kmの猿飛佐助コース（中初級）のバーティカル（駆け登り）、4日は上級者による距離18kmと25kmのスカイレースが行われました。

3日には土屋陽一市長も駆けつけ、「走ることで太郎山への関心が高まり保全につながれば」とあいさつ。実行委員長の松本大さんが「無事下山することが大事です。準備運動をしっかりして2mの距離を取ってほしい」など注意を伝えた後、小学校低学年から70代までの男女が青木村義民太鼓と拍手に送られ10秒ずつ間隔を置いて次々とスタートし、新緑の尾根に取り付いていきました。

大桑村から参加した加藤利雄さん（60歳・木曽森林組合所属）は、2年前にレースに参加して「スカイランニングにはまった」とのこと。「コロナ禍で大会が次々と中止になるなか、上田の大会開催に感激しています」と話し、入念に準備体操をしてスタートしていきました。

19回目となる今年は、県内外から14人の新成人が参加し、館内で戦没画学生の遺作を鑑賞した後、画学生の名が刻まれた石板「記憶のパレット」が設置された庭で式を開催。作家で子どもの絵本専門店「クレヨンハウス」を主宰する落合恵子さんが、一人ひとりに声をかけながら自筆の手紙を手渡しました。

落合さんは、「自分の意思とは関係なく戦争で命を落とした人たちがいることを忘れないよう、また次の世代が〝生まれてきてよかった〟と思えるよう願いながら本を扱ってきた」とし、『ペスト』などの著者アルベール・カミュの言葉「私の前を歩かないでください。（略）私の後ろを歩かないでください。（略）私と並んで歩いてください。そして私の友でいてください」を紹介。「あなたを生きることができるのは、あなただけです」と話しました。

また窪島誠一郎館主が自作の詩「無言の詩」を朗読し、上田市塩田出身のコカリナ奏者・黒坂黒太郎さんによるコカリナ演奏も行われました。

信州大学で音楽教育を学ぶ伊藤有希さん（上田市上田原）は、「これまでも何回か無言館の作品を見てきましたが、今日改めて画学生の遺作を見て、大切なものを伝える力のことを考えました」「戦争があったことを忘れてはいけない。考え続けなければと思います」と話していました。

「蚕都上田」の輝きと未来

150 信濃史学会会員 阿部 勇

常田館製糸場⑤ 従業員募集と繭集荷

昭和3年の従業員1248人。これは独立した製糸場としては上田小県最多の従業員数です（依田社は20余の工場を合わせて約6000人）。

県内の南・北佐久、更埴、上・下水内、県外の北上州、越後、越中富山などから働きに来ました。そのため工場内には宿舎5ヵ所、食堂、米・漬物蔵、味噌蔵がありました。

「年末閉業と同時に募集戦が行われ、正月も、元日以外休みなく、皆、各担当方面に出勤した。これは中々の大仕事であり、若し予定通り募集が出来ぬという様な事であれば操業に重大な支障を来たすので本当に真剣であった」（『思い出』）。年末年始は製糸場間の募集「戦」、募集過程の記録簿は製糸場の宝でした。

繭をいかに集荷するかも大問題。①養蚕農家を廻って②地元の繭市場から③他地域の繭問屋や④出張取引所から⑤契約養蚕農家から（これが一番質の良い繭が得られる）などがあり、大量の繭を必要とする常田館では①～⑤をしました。③では藤岡、深谷、伊豆にまで出向き、④では明治40年に茨城県友部、昭和11年に群馬県新町に出張所を開設しています。

常田館に展示されていた繭

まるこ福祉会で「こどもレストラン」

児童らが地元高大生と交流

元気に遊ぼ！

5日の「こどもの日」を前に1日、上田市長瀬のまるこ福祉会「きらり」で第33回「こどもレストラン」が開かれ、児童40人と保護者が高大生らと交流しました。

この日は当初、ジャガイモの植えつけなど農業体験を行う予定でしたが、前夜の雨で室内イベントに変更。感染防止に配慮しながら、遊具や鬼ごっこで約40人の高大生や地域ボランティアと思いっきり遊び、昼食を食べながら交流しました。

簡単な英語を使ったゲームや鬼ごっこを指導した田中崇さん（市内本郷・66歳）は、「長年ここに通ってお手伝いをしているが、コロナ禍で子どもたちはエネルギーの発散場所を失っている」と話し、笑顔で走り回る子どもたちに目を細めていました。

「こどもレストラン」は毎月第一土曜日に開いており、初めてボランティア参加した丸子修学館福祉科3年の並木悠馬君は「元気いっぱいの子どもたちと遊ぶのは楽しく、勉強になります。これからもかかわっていきたい」。柳澤正敏理事長は、「コロナ禍で各地の子ども食堂が開きにくくなっているが、こんなときだからこそしっかり食べて元気に遊べる場が必要だと開催しました」と話していました。

陽葉

朝早く目が覚めてしまいラジオをつけたら、「NHKラジオ深夜便」のアンカーを13年間務めたという宮川泰夫さんが講演をしていました。その中で作家の五木寛之氏が「回想を楽しむ」をテーマに同番組で語った内容を紹介していました◆「高齢者が回想話をするのは、決して後ろ向きの姿ではなく、来し方を振り返ることで今の自分に活気をとりもどしているのだ。自らを見つめ直し二度目の人生を生きいき過ごそうとしているのだ。そう考えたらどうだろう…」。うとうとしながらそんな意味の話だったかと聞き取りました◆私は高齢者の皆さんが自分史をまとめ、体験を文章化する仕事の手伝いをしたことがあります。書くことは決してラクではなく、記憶を呼び覚ましながら「楽しそうに苦闘していた」方々を思い出しました。ところで、高齢者が身近におり「いつも同じ話を聞かされてたまらない」と感じている読者の皆さん、この際五木理論をほんの少し、参考にしてみませんか。（F）

矢幡正夫さんが写真展を開催

塩田平の多彩な春紹介

地元の塩田平を長年撮り続けている矢幡正夫さん（76歳）が先ごろ、「塩田平の四季 春」と題した写真展を「とっこ館」で開き、塩田平の多彩な春の風景15点を展示・紹介しました。

当地の四季の魅力を知り尽くす矢幡さんは、無言館館主・窪島誠一郎さんとの共著『鼎、槐多への旅 私の信州上田紀行』で写真を担当し、上田図書館倶楽部の季刊誌『環―千曲川地域の人と文化』の表紙を10年間飾っています。また各写真展などでも滋味あふれる作品を発表しています。

とっこ館では今年、四季の風景展を開く予定で、今回は1回目の「春」。水面に里山を映すため池や青空に泳ぐ鯉のぼり、花々に彩られた古刹中禅寺の参道、90歳の古老の田植え姿などに来場者が見入っていました。

「見落としたり、見過ごしていた風景に新たに出合っていただき、写真に撮ってみるきっかけになればうれしい」「ふるさとの大切さが伝われば」と矢幡さん。次の「夏」展に向け準備を始めるとのことです。

UCVと「上田自然に親しむ会」が共同制作

太郎山の植物手帖

上田市の児童に寄贈

上田ケーブルビジョン（UCV）では創立50周年事業として、冊子『太郎山の植物手帖～裏参道から頂上』を「上田自然に親しむ会」と共同制作して発刊。

先ごろ上田市教育委員会を通じ、市内6校の児童に使ってほしい1000冊が寄贈されました。

「上田自然に親しむ会」（西沢典之会長・会員23名）は、01年夏から太郎山の主に裏参道の植物調査を継続的に実施し、調査記録は上田市立博物館に寄贈、16年には会員向けの冊子を製作しました。

同書はこの内容をさらに充実させたもので、両者で構成を詰め、会員が原稿作りに取り組んで完成。草木編189種・木本編49種の四季の植物を写真とともに紹介しています。先ごろサントミューゼで開いた刊行記念写真展も、2日間で約360人が来場する盛況でした。

「親しむ会」会員も同席した寄贈式で、UCVの母袋卓郎社長は「子どもたちが、太郎山に〝こんなに多くの植物があるんだ〟と発見し学んでいただければ」とあいさつ。峯村秀則教育長は「冊子を手に太郎山で植物に接し、体験的・主体的に学ぶことができる」と感謝していました。

冊子はA5判カラー104ページで2000冊を製作。今回の寄贈分は、太郎山をフィールドに学ぶ児童と学校図書館などへ配られます。

サンテラスローズフェア

28日㈮～6月6日㈰ 東御市文化会館前庭

ローズフェアが、28日㈮から東御市文化会館正面玄関前庭で始まります。

大竹茂雄さんら同館スタッフとサンテラスバラの会が丹精して育てたオールドローズ100種とモダンローズ350種、500株のバラの祭典です。

時間は10・00～16・00で、入場無料。バラ苗やバラ雑貨の販売もあります。

週末はミニコンサートを開催。28日㈮は11・00～、ピアニストの神原恵里子さんと丸山晩霞記念館長の佐藤聡史さんがギターで。29日㈯・6月5日㈯・6日㈰は13・30～、サンテラスバンド他が出演します。

フェア開始前からバラを鑑賞することができます。

▼東御市文化会館 ☎㉒3700

百菜チューボー

■料理 牧野隆彦さん

からし稲荷

ピリッとしたからしの風味で、味が締まります。

■材料　8コ分

温かいご飯400g・油揚げ4枚・A（だし150cc・ざらめ25g・酒15cc・黒ざとう5g）・B（すし酢60cc・白ごま大さじ2）・しょうゆ大さじ2と2分の1・辛子少々

■作り方

①油揚げは半分に切って間を開き、3分ゆでる。落とし蓋で押さえて湯を捨てる（最後は蓋を押しつけ水気を押し出す）。

②Aを入れて落とし蓋をして中火で3分煮る。しょうゆを加えて、汁気がなくなるまで煮たら冷ます。

③ご飯にBを混ぜて、人肌に冷ます。

④ティースプーンで③を②に詰め、酢飯の上に辛子を少々塗って口を閉じる。

※油揚げと調味料などを倍量にして煮ておき、半分を冷凍保存しておくと、いつでも使えます。

□器／芦田貞晴・作